「老人福祉論」の授業における二つの試みと考察
－高齢者・障害者への観察力・想像力を育む－

小坂　淳子

Two Attempts in Teaching "Welfare for the Aged" and Discussions Thereon: in order to Develop the Power of Observation and Thought on the Aged and the Handicapped

Junko　Kosaka

要約

介護福祉士の仕事は、高齢者・障害者との対人関係を基盤とする。それを担う20歳前後の大阪総合福祉専門学校生には、半世紀以上もの年齢差や人生経験の隔たりがある。その上、個別の課題を抱える利用者（対象者）をどう理解し、共感を持つことができるのか。そのような問題意識から、ここでは二つの試み（実践）と考察を行った。一つは基本文献の合評による問題意識の醸成と、もう一つは高齢者（80歳）への「ききとり」取材である。これは、高齢者と対話を通じた教育実践による学生の意識の深化を考察したものである。

キーワード：老人福祉論　子規の介護観　高齢者「ききとり」
読書レポート『楢山節考』[1]『蕨野行（わらびのこう）』[2]『恍惚の人』[3]『黄落（こうらく）』[4]

2004年1月26日受理

Ⅰ　はじめに

1．大阪総合福祉専門学校の教育理念と実践

著者の前任校である大阪総合福祉専門学校は、1992年に厚生省の介護福祉士養成指定施設となった学校である。少人数教育が特徴で、Ⅰ部（定員35名）の２年課程とⅡ部（26名）の３年課程が設けられている。高校を卒業直後の若い学生から社会人経験を経た学生、大学や他の専門学校を経て入学してくる学生等がいる。将来の仕事としてなぜ介護の仕事を選んだのかと言う理由については様々であるが、人間に直接かかわる仕事がしたいという事が前提としてある。また、祖父母の介護経験をした、高校の実習体験で介護をして面白かったとか、アルバイトで介護に係わったことがきっかけで、さらに専門的に福祉や介護の勉強がしてみたいといった理由が多く見られる。

この小論は、専門学校の教育理念である「民主主義の担い手」や「現場に役に立つ人」をどのようにすれば養成する事が出来るかという視点にたっている。そして、将来専門職として現場での具体的な諸矛盾を見出し、考え、分析し、解決していく力のある人材養成を行う教育課題の実践とその考察を試みたものである。

先述のように、多様な年齢層と動機をもつ学生に対する学校の教育理念に、高齢者、障害者の権利を守ることができる「民主主義の担い手を育てること」と「現場で役に立つ人を育てる」があげられている。この二つの理念は密着して

いて切り離して考えられるものではない。つまり、「民主主義の担い手を育てる」ということは即ち「現場で役に立つ人」に繋がっていなければならないからである。

「民主主義の担い手」を具体的に考えてみると、福祉の現場で、人間の尊厳を尊重する視点で問題点が見出せ、考え、分析し、解決していく力をもつ人材養成を行う事である。そのことは「現場で役に立つ」と言う言葉に直結すると考えるからである。

さらに、専門学校の教育理念として、現場で役にたち、実践レベルで力量をつけて、専門職として社会に認知され、そして、職場のリーダーになれる人を養成することもあげられている。

対人関係を基とする労働

介護福祉士の仕事は、基本的に対人関係を基とする仕事である。福祉の現場はチーム労働であるため、タテの人間関係（対利用者）においても、ヨコの人間関係（対職場）においても対人関係を基としている。現場で役に立つためには、学んだ知識や技術を実際に対人関係の中で有効に活用できなければならない。介護福祉学は、学んだ知識・技術が実際の対人関係のなかではじめて生かされる実践の学である。

筆者は、機会があればそれぞれの福祉施設長に「現場は、どのような人を求めていますか」という質問をしてみる。ほとんどの方が例外なく、「社会性のある方を求めています」と言われる。社会性があるということは、その社会に適応する力、ごく普通に社会生活ができる力、社会に関する基本的な知識に基づいて、他の仲間と協力して自分たちの要求を実現していく力を持つことである。同時に、人権に関する基本的な理解を身に付けているということである。

では、そういう社会性をどのように育んでいけば良いのだろうか。具体的には挨拶ができる、人の顔をみて話すことができる、自分の意見を拙くても述べることが出来る、疑問な点を見つけることができる、自分と違った意見に対して他人を尊重できる、何かトラブルが起こったら力をあわせてそれを解決していくといった力を育てるという事である。このような事を出来る限り育む事が、現場で役に立つ人材を養成するために必要な第一歩であると考えた。

しかし、今日の競争社会で学生が受けてきた教育は、社会の一員として他の人と一緒に生きていく技術や態度は切り落とされつづけてきた部分でもある。また、社会生活においても人とコミュニケーションをしなくても一向に差し支えない日常生活がある。コンビニ化やバーチャルな世界で、ある程度の知的好奇心が満足させられる若者文化がある。そこでは、知識として知っている事と出来る事が、ますます分離してきている。経験しなければわからない事について経験する機会が少ないし、またしなくてもすむ環境に生活している。たとえ経験していても経験そのものの絶対量が少ないだけに、これらの点を意識的にとりくまなければ、社会性や人と交わる力は身についていかない。

他者との関係形成

自分を発見し、他者を発見し、自分を変えることができるそういう力は、身近な社会関係で他者とかかわる中で形成される。お互いのよさを発見して（認めて）、自分が仲間の中で生かされていることを知り、その集団での「居場所」ができ、他者への信頼関係が生まれる。自分自身に対するあるいは他者に対する信頼感は、トラブルや問題解決のときに基礎になるものである。クラスで、どのような人間関係をつくっていくかという課題は、将来、対人関係を媒介とする介護福祉を志す者にとって、貴重な人間関係のトレーニングの機会でもある。

介護福祉士の養成には厚生労働省の指定カリキュラムで、10週間の介護現場実習が義務づけられている。現場の力は、学生に変容の機会を与えてくれる。どの養成校もそれぞれの実習期

間に合わせてカリキュラムが組まれていく。実習によって揺さぶられ、触発された経験を組織し、一人ひとりの認識（学び）を深める事を目指す。認識をふかめる組織をどのように創っていくかが学習の質を決定していく。最初に挙げた社会性はこのようなゆさぶりや組織（社会関係）の中で形成されていく。具体的には学んだ事をまとめ、発表させる、人の発表を関心をもって聞いて自分とは違う感じ方や考え方の意外性を発見する。そして、固定的、一方的にしか見ることが出来なかった自分のものの見方や考え方をくずして、様々な見方や考え方に気づく機会とする。また、自分の考えや思いを伝える、そういう関係性のなかで社会性が育てられるのである。

2．正岡子規の介護観から学ぶ
―著書『病状六尺』[5]から―

正岡子規の著書『病状六尺』は、子規が結核による脊椎カリエスで7年もの間闘病をして、明治35年に35歳の若さでこの世を去る、死の二日前まで、新聞「日本」（日刊紙）（明治35年5月5日から9月17日）に連載していたものである。

寝たきりの重病人になって７年間、たった六尺の病床から身動きができない状態となって、「朝から晩まで誰か傍に居って看護をせねば暮らせぬ事」となった子規の視点から、看護や介護はどうあるべきかを示唆している書物である。

①　介護の視座

著書『病状六尺』から子規の介護（介抱）の考え方や視座を紹介する。子規によれば、病気の介抱には精神的介抱と形式的介抱の２種類があり、前者は看護人が同情をもって病人を介抱することで、後者は病人をうまく取り扱うことである。両方とも同時に得られるのならよいが、どれか一つ選択するのなら、子規は精神的同情のある介抱を選んでいる。しかし、この同情的介護人は容易に得られないので、形式的の看護人だけでもどれだけ病人を慰めてくれるかわからないと言っている。看護人が病人の生活の質を決定し、病人にとって如何に重要な存在であるかは、「病気が苦しくなった時、又は衰弱のために心細くなった時などは、看護の如何が病人の苦楽に大関係を及ぼすのである」と記されている通りである。

介抱（介護）の内容を次のように述べている。

――病人を介抱すると言うのは、畢竟病人を慰めるのにほかならんのであるから、教えることも出来ないような極めて些末な事に気が利くやうでなければならぬ。例えば、病人に着せてある蒲団が少し顔へかかり過ぎていると思えばそれを引き下げてやる。蒲団が重たそうだと思えば軽い蒲団に替えてやるとか、あるいは蒲団に紐をつけて上へ釣り上げるというようなことをする。病人が自分をうるさがっているようだと思えば少し次の間へでも行って隠れておる。病人が人恋しそうに心細く感じているようだと思えば自分は寸時もその側を離れずに居る。あるいは他の人を呼んで来て静かに愉快に話などをする。あるいは病人の意外に出でて美しき花などを見せて喜ばせる、あるいは病人の意中を測って食いたそうなというものを旨くこしやえてやる。箇様な風に形式的看護といってもやはり病人の心持ちを推し量っての上で、これを慰めるような手段をとらねばならぬのであるから、看護人は先ず第一に病人の性質とその癖を知る事が必要である。けれどもこれは普通の看護婦では出来るものが少ないであろう。多くの場合においては母とか妻とか姉とか一家族に居って平生から病人の癇癪の工合などを善く心得ている者の方がうまくできるのである。――

介護ではなくて、この時代では"介抱"と表現されているが、子規は病気の介抱に女子教育が必要であることも強調している。それは、看護婦を養成するという教育ではなくて、一家に病

人が出来たというのは丁度国に戦いが起こったのと同じようなもので、病人を抱えた時は何を優先して家事をするのかを判断できるような一般教育の必要を説いている。

子規の介護の視点は、「病む人」として関わるのではなく、「子規という病む人」の性質とその癖をしり、病態に合わせて、本人の望むところの心境を理解し、それに共感し、手を出しすぎず、必要な時は傍で介護する、そういう介護を子規は、「同情をもって」と表現している。

② 「受容すること」－諦観について

子規に、或る人からあきらめるということについて質問が来た。その内容は、子規は死生の問題は大問題であるが、それは極簡単なものである。それは、一旦あきらめてしまえば直に解決されてしまうと言った事と、またかつて兆民居士（中江兆民：病気で余命１年有余と宣告された）を評して、あきらめる事を知って居るが、あきらめるより以上のことを知らぬ、と言った事と矛盾しているようだがどういうものか、という質問である。あきらめる事と、あきらめるより以上のことについてどのように異なるのかについて、子どもとお灸の事例を紹介しながら説明している。

――子どもがお灸を据えるのはいやだと泣いて逃げるのはあきらめがつかないのである。もし、その子どもが到底逃げるのにも逃げられぬ場合だと思って、親の命じるままにおとなしく灸をすえてもらう。これは己にあきらめたのである。しかし、その子どもが灸の痛さに耐えかねて灸を据える間は絶えず精神の上に苦悶を感じるならば、それは僅かにあきらめたのみであって、あきらめるより以上の事は出来ない。子どもが親の命じるままにおとなしく灸を据えさせるばかりでなく、灸を据える間も何か書物でもみるとか自分でいたずら書きでもしているとか、そういうことをして灸の方を少しも苦にしないというのは、諦めるより以上の事をやっているのであって、病気の境涯に処しては、病気を楽しむということにならなければ生きていても何の面白味もない――と言い切っている。

子規は、兆民のことについて、彼が『一年有半』を著して、死生の問題はあきらめがついたように見えるが、あきらめがついて、その上でかの天命を楽しんでいる、というような"楽しむという域"には至らなかったと思うと述べている。しかし、兆民もあと２、3年も病気の境涯に付き合ったら、もう少し楽しみの境涯に入る事ができたのかもしれないと言っている。子規にとってはあきらめる事以上のことをするには或る程度の時間が必要であると考えていたのかもしれない。

このことに関連して連想されるのは、キューブラ・ロスの『死ぬ瞬間』[6] における指摘である。人間が逃れられない事態に出会ったとき、何故私が？という"自己否定が生じてそれが自他への取引、"諦め"の段階を経てやがて"受容"の段階に至ると述べられている事との関連が想起される。ここでいう「受容」とは、「諦めるより以上のことをする」という意味に解釈できる。

③ 希望・時間について

「如何にして日を暮らすべきか」、「誰かこの苦を助けてくれるものあるまいか」と煩悶している子規にとって、何より嬉しいことは「情けある人」がきて珍しい話をしてくれることだといっている。また、情けある人の訪問はうれしいが、ただ黙って座られるのは気を遣って困るので、珍しい話をしてくれる人を歓迎している。今日で言うお話ボランティアのような人の要請をしている（「毎週水曜日乃至日曜日を我が庵の面会日と定め置く。何人にても話のある人は来訪ありたし」）。本の中では、俳句の仲間が当番をきめて訪問をしている事がわかる（「午後

4時過ぎ、左千夫今日の番にて訪れる」)。

客との向かい合い方についても次のように記されている。

――客が来た時は、なるべく眼の正面をよけて横の方にすわってもらいたい。物でも眼の正面一間ぐらい間をおいてほしい。それでは寝台にすればといえば、寝台は幅が狭いので尻がおちるので困る－

寝ている人の視線から物の位置がどう見え、どういう角度で人が座れば圧迫感がないかなどについても具体的に注文をしている。

このように、俳句の仲間や見知らぬ訪問者、隣の子どもが訪問した時の様子など、ご近所とのつながりもいきいきと書かれていて、死の二日前まで新聞に連載をしていたこともそうだが、病床にいながら社会と豊かに繋がった生活がある。まさに病気を楽しんでいるのである。

『病状六尺』が100回すんだところで、一日に1回とすれば100日過ぎた事になる。一般的に100日の月日は極めて短いものに違いないが、子規にとっては10年も過ぎたような思いで、少しでも時間を要するものを思いつくと、これが何時まで続くのかと初めから気になると書いている。この連載をはじめる最初に、新聞社に毎日送る状袋の上書きが面倒なので、状袋に宛名印刷を依頼したところ、新聞社が300枚刷って送ってきた。宛名印刷を頼む時でさえ、病人として余り先の事として笑われないかと密かに心配していたのに、300枚も送ってきた事を感慨深く思っている。そして、子規は、時間というものと希望というものを次のように書いている。

――この百日という長い年日を経過した嬉しさは人にはわからんことであろう。しかしあとにまだ200枚の状袋がある。200枚は200日である。200日は半年以上である。半年以上もすれば梅の花が咲いてくる。果たして病人の眼中に梅の花が咲くのであろうか――

我々は限りある時間を生きている。限定された時間を意識する時、どんな配慮が必要かも示唆される個所である。300枚送られてきた時の子規の思い、100回終わって、200枚残った時の子規の思いは、200枚であと半年以上の子規の希望・時間を約束し、子規を応援しているのである。このように、言葉をいくつ並べるよりも一つの事物がもつ意味が大きい事がある。

④　正岡子規の介護観の今日的意義

およそ100年以上前に子規が病床の体験から考えた介護のあり方、考え方の一部を簡単に紹介してみた。そこには、具体的な介護方法をはじめ、病や死をどう受け入れ、乗り越えていくのか、また希望や時間そして生き甲斐について述べている。一言で子規の思いを語るならば「病気を面白く楽しむ」と言えるのではないか。『病状六尺』では、病人が病気を楽しめるように介護はどうあるべきか、その視座を示していると思う。

現在は子規の時代からすると約1世紀近く経過している。1987年に介護福祉士としての専門職が誕生し、2000年に介護保険制度が発足した。家族の仕事としての介護が「社会化」されたのは今から20年にも満たない。ひとにとって「生老病死」は避けられない事であり、いつ介護される立場におかれるかわからない。その時の心細さや苦しみは、何世紀を経ようとも変わる事はない。

家事労働を省力化する電化製品や医学もさらに女性の教育も、子規のいた時代に比べて大きく進んだ今日、子規の望んだような「精神的介護」がなされているであろうか？

昭和43（1968）年、大阪市に身体障害者家庭奉仕員制度が発足すると同時に、ホームヘルパー（大阪市家庭奉仕員）として活動された加藤みどりさんは、子規と同じように、痴呆になって

も、障害があっても、「生活が楽しくなれれば生活でない」という視点から奉仕員活動をされた先達である。[7)]

――「家政婦さんが来たよ」と娘は老人に私を紹介した。老人は少しも表情をくずさず、返事一つしなかった。そして娘は「家とトイレの掃除、ズボンの洗濯を」といって帰ろうとした。私はその時、「もっと大事なことを聞かせてください」と呼び戻した。そして、老人のくせ、能力、病歴、主治医の名前、老人の一番喜ぶものなどを尋ね、メモをとろうとしたが、主治医の名前以外、明確な答えは何一つ得られなかった。「何せ呆けていますので」ということで終始した。

彼女は身体障害者の残存能力を生かす生活支援の視点から、高齢者の残存能力に着目している。この高齢者にとって、何が一番大切なのかをみきわめてから生活支援の方法をくみたてている。さらに、必要であれば地域の方に声をかけ、当事者同士のネットづくりもされている。大阪市のヘルパー新人研修テキストにされていたこの実践記録は、今日でも新鮮な発見がある。

日本画家の小倉遊亀は、100歳を前に介護が必要な状態となった。104歳の小倉遊亀の在宅での介護を孫の寛子さんが書物の中で次のように述べている。[8)]

「我が家の介護は、命長らえばいいという事が目的ではない。より生き生きとした生活を確保するための介護なのである。そして、介護のレベルを死守することは、すなわち、祖母の命を守る事」と介護をとらえ、そこでの介護士さんとの出会いは「地獄に仏、まるで泥池の中から一輪の蓮の花に出会ったようなもの」だと言及されている。

人が介護を必要とする時、尊厳が保障されるような制度や内容が生まれてきたのが20世紀ではなかっただろうか。

II　基本文献の合評をもとにした学生の意識の変容

さて、著者が担当したのは「老人福祉論」の授業である。言うまでもなく「老人福祉論」は高齢者が対象である。学生に"老いること"をどう理解してもらうのか、年齢差があり、異文化をもつ超高齢者と、どうかかわることができるかという課題に直面する。

学生は施設実習で、高齢とともに様々な障害を持ち、介護が必要になり、あるいは生と死が隣り合わせの時間を過ごしている高齢者に出会う。「死にたい」、「お迎えを待っている」という高齢者に出会う時、生きることや死ぬ事について考えざるを得ない。また、難病で、身体が不自由になり、長期間にわたり、常に誰かの援助を得て生活されている利用者と出会う。その利用者は、自分が生まれる前からこの状態で生活されている。一体、どんな気持ちで生きているのか、生きることの意味や価値について深く考えさせられる。青年期は、人を愛する事はどういうことか、どう生きるのかという根源的な問いにぶつかる時期である。実習での実際の利用者とのかかわりは、自分自身の生き方を問う機会となる。

子規は、死生の問題は大問題であるが、それは極単純な事であるので、一旦あきらめてしまえば直に解決してしまう。問題なのは、どう生きるかである、としている。しかし、死を宣言されても普通は、子規のように諦観することはできない。不自由な身体に、どう向かい合えばいいのか、納得できない。だからそこ、受容し、積極的に対処していくために他からの理解と支援（ケア）が必要となる。

人間には自分ではどうしても選べない三つのものがある。それは、その人の生きた「時代」であり、持って生まれた「身体」であり、「死」である。これらの事実や重さは介護福祉士としての職業を遂行するうえで直面せざるをえない

課題である。

著者は、これらの事を学生と一緒に考えていく手段として「老人福祉論」の授業で、二つの方法をとりいれた。最初に行ったのは、「生老病死」に関する書物を読むこと、次に、80歳に照準をあてた高齢者の「ききとり」である。

2001年度から、「老人福祉論」の授業時間が30時間から60時間（4単位）に延長されたことによる時間的なゆとりが生じたことも、背景にある。

1．方法と意義－読書・合評を活用して展開－

著者がなぜ、本を読むことを重視する授業を取り入れたかについては、二つの理由がある。方法としての読書は、「老人福祉論」だけでなく、福祉に関するその他の授業でもしばしばとりいれている。かつて、伊藤隆二は、著書『福祉の思想』で、福祉の文献として51冊の本を紹介された。[9] 著書のはじめに、「福祉の思想は、人が"よく生きる"とはどういう意味なのかを明らかにすることを目的にしている」と記している。

福祉の対象者は生活困窮者であったり、知的や精神や身体に障害があったり、養護や介護が必要な子どもや高齢者などである。自分で選んで福祉の対象となったわけではないが、現在の社会の価値観からすると、福祉の対象者は社会的弱者で、評価の対象とすらなりえない現状がある。その対象者の「よく生きる」ことに向かい合った時、相対的な価値観では評価できない価値観で、ものや人を見ていかなくてはならないことに気づく。その気づきは、利用者や対象者から体験を通して感じとり、学びとることではあるが、様々な価値観をこのような古典ともいわれる文学のなかで学ぶ事ができるからである。

また、福祉の現場には矛盾や問題点が少なからずあるのが実情であり、それでもなお、そこで働きつづけるために福祉を学ぶものにとって"福祉哲学"が必要となる。前述の著書のなかで、次のように述べている。

――何年間か、医療や教育や行政などの面から『福祉』のことに関係してきた実践者の多くは、あるとき、みな一様に、自分の取組んでいる仕事の意味や価値はいったい何なのかといった根源的な問に直面すると、よくいわれている。この問いに、その人なりに解答が得られない場合は、自分の立場にとまどい、ときにはその立場を去っていく。そのとき、スーパーバイザーが助言してくれるのだが、その助言の多くが方法や操作の効果をあげることに終始しているというのも、なげかわしい。かかる実践者が求めているのは、実は福祉の哲学だったのである－

福祉の現場で働き続けることができるように、"福祉の哲学"を学ぶ教材として、この51冊を中心に、課題や場面に応じて、本を読むことを授業に取り入れてきた。

とりあげられている51冊は、日本だけでなく、諸外国の古典といわれているものも含んでいる。そこでは、人間が人生に出会う如何ともしがたい事、避けられない事に遭遇したら一体何を感じ、どんな思いで悩み苦しみ、どう処していくのかということが書かれている。すぐれた書物には、時代や場所が変わっても変わることのない普遍的な真実が示されていて、人生経験の少ない学生にとってもそれらを読むことで、疑似的に体験することができ、考えるヒントやささやかな見通しを持つことが出来るからである。

著者自身がこのことを確認した例として、一人の学生との出会いがある。かつて、大阪総合福祉専門学校に社会福祉士の受験資格取得のコースがあり、私はそのコースを担当させてもらった。そのクラスの学生の一人が、入学後ガンがみつかり、入退院を繰り返しながら登校するという学生がいた。彼女のいるクラスで正岡子規の『病状六尺』を読んで合評した。子規が新聞

「日本」に連載したように、入院中は毎日学校に"その日の出来事"を書いて送ってもらった。入院中の彼女を、それこそ子規のように当番をきめてお見舞いにいった。私も含め、見舞いにいった級友の誰もが彼女から何やら生きるエネルギーを反対に貰った。

彼女は21歳と5ヶ月で帰らぬ人となった。彼女の一周忌にむけて、クラスメイトたちが学校に送り届けられた葉書や手紙を中心に、遺稿集『真穂子－わたしは幸せです。みんなと出会って』[10] を作成した。このことが、新聞やテレビなどのマスコミでも取り上げられた。

葉書の一部が1997年の11月の朝日新聞の「天声人語」にも次のように紹介された。

――最近のことばから▼大阪府堺市の専門学校生だった木田真穂子さんは去年の夏、がんで亡くなった。21歳。直前まで学校に手紙を送り続けた。＜明日、カツラやさんが来てくれます。初めはすごく嫌だったけど、いざ抜けてくると割と平気で、どんなカツラにしようかとウキウキ楽しみにしています。▼この時期、目もほとんで見えなかった。最後の手紙の一節。＜肺のレントゲンを見て、医師は一言「まだ、呼吸はできるなぁ」とおっしゃいました。私は「ハア～確かに！」と思いました。（中略）それでは、また書きまする！＞同級生たちは今年、追悼集を編んだ－

たった21歳と5ヶ月の若さで夭折したが、彼女は子規のいう「あきらめることの以上の事」を実践していたように思えてならない。同じように病気を抱えている人からテレビを見たり、新聞を読んで励まされたので、本を送って欲しい、という問い合わせが学校に相次いだ。

在宅で療養していた彼女の様態が急変し、緊急入院をして亡くなる7時間ぐらい前、痛みに"温灸"をして欲しいと訴えた。家族の方が看護婦さんに許可を求めたところ、煙がたくさん出て病室の火災報知機がなってしまうので困ると言われた。

――それを聞いて、よほど追いつめられて状態になっていたのだと思います。せっぱ詰まった激しい口調で、どうしてもやってほしいと叫ぶようにいいました。結局、病院も理解してくださって、温熱療法を認めてくださったのですが、それで少し落ち着いた真穂子は、「さっきのことを看護婦さんに謝りたい」と私にいうのです。私は、病気で苦しい時に、そんな事、気を遣わなくていいよ、と言ったのですが、「どうしても謝りたい」と言って看護婦さんがこられた時に「さっきはごめんなさい」と謝っていました。そして、このことを思い出すにつけ、真穂子は、最後まで自分を客観的に見、人に対する思いを失わなかったのだとつくづく感じさせられました―

亡くなった後、家族の方は彼女の机の上に、第二次世界大戦中、ユダヤ人としてナチスの強制収容所に送り込まれたV・E・フランクルの著書『それでも人生にイエスと言う』[11] の本が置いてあるのを気づかれた。その本の中には、悪性腫瘍を患った男性の患者が人生の最後の数時間でもまだ、まわりの人をいたわり、気配りをしたことが紹介されている。彼の死ぬ前にとった態度を「自分の可能性が制約されていると言うことが、どうしようもない運命であり、避けられず逃げられない事実であっても、その事実に対してどんな態度をとるか」ということによって実現される価値を翻訳者の山田邦男は解説の中で「態度価値」として紹介している。彼女はフランクルのいう「態度価値」を実践したのだと思った。

三年目の偲ぶ会で、遺品の中にあった彼女の創作した物語を家族の方から紹介してもらった。早速学校で紹介したところ、どのクラスの学生からも好評を得て、『ニーナの願い』[12] として

絵本出版された。この絵本でも、運命として死を受け止める彼女の覚悟と強さが見事に表現されている。

われわれの前から稲妻のように去っていった彼女であったが、仲間と出会うことの意味、学ぶ事の意味、最後までよく生きることの意味について多くを教えてくれた。このように、著者自身の問題としても学生や教育にかかわる視点を古典をはじめとする書物のなかに示唆されるものが多いからである。

2．学生の反応と成果

さて、「老い」の本にかかわって私が「老人福祉論」でとりあげたのは、深沢一郎の『楢山節考』と村田喜代子の『蕨野行』の2冊と、有吉佐和子の『恍惚の人』と佐江衆一の『黄落』の計4冊である。いずれも文庫本になっており、入手しやすいものである。

『楢山節考』と『蕨野行』

「楢山節考」が世に出た1956年は、その年度の経済白書に"もはや戦後ではない"とうたわれ、その後わが国の経済が神武景気に入る時の作品である。高い経済成長と社会構造の変化とともに高度経済成長の流れに取り残される障害者、高齢者の問題がクローズアップしてくる時代である。「生老病死」はどんな時代であっても避ける事が出来ない問題である。老いた親をどうするのか、介護が必要な状態になれば子どもに何ができるのか。かつては長男が担っていた親の扶養（介護）は戦後になって崩壊してしまった。社会的な支援がほとんど得ることが出来ない時代に、親を捨てざるを得ない現状があれば、それらは『楢山節考』の世界と重なって当時の人々の心をとらえたのではないだろうか。同じ姥捨てを取り扱っている『蕨野行』（平成6年単行本）は、『楢山節考』に比べるとはるかに最近の作品である。同じく人間にとって避ける事の出来ない死の前で、身分や経済力は何の役にもたたない。どのように死ぬかという事と、どのように生きるのかという事が不可分に結びついている事を教えてくれる作品である。この2冊を姥捨ての話として比べながら合評した。

『恍惚の人』と『黄落』

1969年版の「厚生白書」にはじめて"ねたきり老人"という言葉が登場した。有吉佐和子が『恍惚の人』を発表し、ベストセラーになったのが1972年の事である。

この小説は痴呆高齢者の介護問題が深刻な問題であり、"恍惚"という言葉が"痴ほう"同義語でつかわれるような社会的影響を与え、その介護が如何に家族、とりわけ嫁にとって深刻な問題であるかという事を明らかにした。

1995年に発表された佐江衆一の『黄落』は、一組の夫婦が4人の老親をかかえる時代になって、自分の親をどうするかという男の立場から介護を書いたものである。『恍惚の人』の時代と異なって、介護を嫁だけに任せる事のできない時代になってきている。

『恍惚の人』から『黄落』まで30年という年月が経っている。この30年をめぐって、クラスで議論が起こった。介護をめぐる社会状況は『恍惚の人』の時代とくらべれば比較できない変化がある。いや、30年たっても介護を女性が担い、男性は逃げるという構造は一向に変化していないという議論である。

具体的な進め方

具体的な進め方は、課題図書として、2ヶ月前から本を提示しておく。学生は上記の4冊のうち一冊を選んでもらい、グループの人数が同人数になるように調整して4つのグループをつくる。読後、グループごとに発表してもらうのである。

発表は、自分たちのグループの選んだ本についてあらすじの作成、作者の紹介、どんな時代か、どんな福祉（協同）の形があったかなどに

ついてレジュメを用意する。発表グループのメンバーが教室の中央で円になって座り、その周りを聴くグループたちがぐるりと囲む。発表グループは、自分たちの選んだ本を読んで印象に残った事、作者がこの本の中で伝えたいと思われる事、何故、古典（ベストセラー）になったのか等について話し合う。聴くグループたちは、用意されたレジュメをもとに、発表グループのメンバーたちの話をきく。発表グループの中から選ばれた司会者は、1グループの持ち時間約40分をめどの合評を進める。聴くグループたちは、発表グループの本を読んでいないので、司会者は、聴くグループたちの質問をつくる配慮も行う。

このようにして、1回目の授業（90分）で『楢山節考』と『蕨野行』を行い、2回目の授業（90分）で、『恍惚の人』と『黄落』を合評した。

発表が終わると、発表したグループも聴くグループも全員が感想文を提出する。このようにして、学生は1冊しか読んでないが、他の人の発表や話し合いをきいて、最終的に4冊についての感想文を作成してもらう。

発表後の作成レポートは『読書合評』[13] として、2001年にⅡ部5期生、2002年にⅡ部6期生それぞれ冊子として作成した。以下は、その一部である。

■『楢山節考』と『蕨野行』について

――親を捨てるなんて考えた事なかったから、もし、僕がこの時代にいて、同じ立場だったらどうしていただろう。今回の発表を聞いて印象に残ったことは、生きる意味についてである。

『蕨野行』では死んだほうが楽だと、皆さんが言っていたのを聞いて、生きていても暮らしの保障がない蕨野に行く位なら、死んだほうが楽なんかなと、僕も思った。時代背景からみると納得してしまうが、今の時代でも死んだほうが楽と言えるのではと僕は思う。なぜなら、生きていたら色々な壁にぶち当たる、傷つく、将来の保障なんて、誰にもない。しかし、人は生きていかなければならない。それでは、人が生きる意味て何だろう。笑う事、泣く事、怒る事等など全て死んでしまったら出来ない事、そんなのはさびしいから生きていこう。そしてたくさんの壁にぶち当たろう、挑戦しよう。そんなことを繰り返し考えていたら、色々な人に助けられ、また助ける関係を築いていくことが大切だと思った。

最後に、今回の発表で学んだ事は、人は一人では生きられない、たくさんの人に出会って自分にとって、マイナスになることでもプラスになることでも経験してきたいと思った。また、親の存在についても改めて考えたのと、同時に生きることの大切さと、生きていることが幸せをつかむための条件だと思った。（Ⅱ部5期SG男）

――『蕨野行』の発表を聞いて～死んでも生き返るという前向きな締めくくり方や、捨てられてもワラビ衆が皆で力を合わせて生きることや、村に降りれば家もあり、仕事もあることからグループホームを連想した。

私は『楢山節考』を読むグループだったが、老人を捨てるのは似ているが、皆が"蕨野"という許された場所と条件の中で、力を合わせて生きるというのと、死ぬために楢山に向かう違いは大きいと思った。

『楢山節考』は、昔の話ではあるが、現在にも照らし合わせられる。食料不足のため、赤ちゃん、老人など役に立たない者、弱いものは捨てられる。今も生活難、住宅難のために子どもを一人しか産めない。自分たちが生きるのが精一杯で、親たちとは同居できない、面倒を見られないと言うのと似ている気がする。現在も特養など入れっぱなしで面会にもこない。そういうのが現状である。季節が変わっても、衣替えすらしてくれない家族や、ADLが落ちて転倒して連絡しても"よろしくお願いします" で会い

にこない家族がいる。きれいな服などを着ていると、大切にされていると感じてしまうが、本当にいろいろな家族の形があることを感じる。この本を読んで、楢山は現在にもあるのだ、ということ。土地ではなく、人の心の中にあるのだ、ということを考えさせられた。考えさせるがために、ハッピーエンドではないのだと思った。（Ⅱ部5期　KM女）

――『蕨野行』はどんな本なのか、全く知らなかったので、新しい姥捨ての形だと聞いて面白かった。60歳で自給自足を行うワラビ衆に入ると聞き、それがどんなものか興味を持った。楢山とちがって歳をとっても「生」への道が残されているところが面白い。

今まで別々に暮らしていた人たちが、60歳を機に今までの生活を全く捨て対等に暮らす、というのはどんな感じなのだろう。中には「生」をあきらめて自ら死を選ぶ人もいると聞いた。もし、私ならこの人と同じ道をいってしまうと思う。「生」に執着して頑張る馬吉の姿に「生」の素晴らしさを感じた。作者の言いたかったことは、「生」と「死」について考えてもらいたい、ということではないのかなと、私は思った。一度読んでみようと思う。（Ⅱ部6期　SM女）

――『蕨野行』のディスカッションでは自分がワラビ衆になったら生きていけるか、と言う質問が核心をついていると思った。それは自分が老人になったら、どう生きるか、という問いかけでもあるように思えた。

年寄りのサバイバルゲームとMTさんが言ったが、私はこれからの時代も老人が増えすぎて必要とされる高齢者、認められる高齢者になるにはサバイバルゲームを生き抜くような強靭な老人でないと生きてゆけない世の中がくるのではないかと思った。二つの本も是非読もうと思った。（Ⅱ部5期　NS女）

――発表の中で、おりんばあさんが「姥捨て」を自然にうけとめる母親としての強さ、等について触れられていたが、その事がつらい現実や悲しみを読み手に深く伝えていたのではないか、と思う。最後にNZ君が（現在は）子が親を山に捨てることはないが、社会がお年寄りを捨てると述べていたことに、なるほど、と思った。状況は違えども根本的には同じことなのかもしれない。

次の『蕨野行』の発表をきいて「生きる」、「生への執着」というものが前面に出ているような作品であるように感じた。当時の60歳と言えば今でいうと意識としては80歳ぐらいに該当するだろうか。そのような状況でなおも生きようとする9人の年寄りの姿を描いているこの作品は、まさしく「生きる」ということについて問いかけてくる作品である。

発表を聞いた限りでは、この作品は前の『楢山節考』のようにつらく、悲しい現実をリアルに描き出すというものではなく、文章の書き方（技法）によって読み手に迫ってくるというイメージを受けた。発表を聴いて、情景が浮かんでくるようである。旧仮名遣いで書かれている、等の発言からそう感じた。

今回の発表の2作品はどちらも姥捨てがモチーフになっている。当時の厳しい生存条件では役に立たない年寄りは捨ててしまわざるを得ないということであったと思う。現在とはかなり状況は異なるが、お年寄りを社会全体の中でどのような存在として観ていくのか自分自身の"お年寄り観"についても考えさせられた。（Ⅱ部5期　ST男）

――もし私の身内、私の祖父母、さらに自分自身なら・・・考えただけでもゾッとする。村の掟であるとか、若い人たちの生命をつなぐためという名目や理由があるのはあるだろう。しかし、家族の誰かが急に居なくなるなんて、とても寂しいし、割り切れないものだと思う。班

の討論の時も話したが、もし自分が蕨野行の一人になったとしたら、村の掟に逆らって蕨野行きはせずに家に留めてもらうかもしれない。食糧難で留められないのならば、妹シカのように山入りして野人同然の暮らしをしているかもしれない。またもっといえば、村の掟を変える運動を起こし、蕨野行きをしなくてもすむ方法を村の皆で協議する運動を起こしたいと思う。蕨野行きはまるで、行けども戻れぬ特攻隊のようなものだ。戦争が過ちであったように蕨野行きも過ちだと思うし、間違った事だと思う。(Ⅱ部6期　IK男)

――『楢山節考』の物語の最後は、結局古いしきたりどおり、辰平はおりんを山へ置いてくるというものだった。私はこの物語から、母を自らの手で山へ捨てなければならない辰平の辛さや、どこにもぶつけようもない憤りのようなものを感じた。しかし、それ以上に、おりんの自ら進んで捨てられようとする態度や自らの死は自らで決める強さと言うか、すごさを感じた。食糧不足と言う村全体の深刻な問題がなければ、このような風習はないのだろう。私は、自らの死を決意するおりんが、現代でいう"尊厳死"を選択したのではないかと思った。

『蕨野行』の物語も『楢山節考』とよく似たもののように捉えていたが、蕨野という場所で、少しの間でも生活できる環境があり、その中でも"何としてでも生きよう"とするたくましさを強く感じた。人の命には限りがあり、そのことを知り、死を迎える準備"死に仕度"について、私は今まで考えた事もなかった。死を受容するということについて考えてみたいと、この物語を読んで強く感じた。(Ⅱ部6期　OK女)

――二つの班の発表を聴いていて、だんだんと江戸時代にひきこまれていった。姥捨て山はすごい悲しい掟である。とても今考えられない定めだ。年をとって老人になれば生きていてもしゃあない。そういう話や現実を目のあたりにして何かこうもう嫌になってきた。もっと老人ががんばっているすごい年寄りがおる、そういう話をしたい。僕も実家に大正7年生まれのおばあちゃんがいる。僕が小さい頃は元気だったけど、今は介護度2、でも元気だ。でももうすぐ死ぬんだろうって思うと涙が出てくる。絶対死んで欲しくない。ばあちゃんとしゃべっていたらすごく甘えてしまう。なんか僕を包み込んでくれる不思議だ。自分の母親や嫁がもつ愛情より落ち着くのは何やろうなーばあちゃんと会いたいなーまた、甘えたい。(Ⅱ部5期　TN男)

■　『恍惚の人』と『黄落』について

――『恍惚の人』の時代は約30年前である。当然、作者は30年前の世論をベースに書いている。しかし、30年前と現代では社会情勢は大きく異なるし、女性の社会における地位も今とは雲泥の差がある。政治・経済・スポーツ各分野での女性の地位向上は目覚しいものがある。潜在的な意識として、女なんかに・・と思っている人も少なくないだろう。しかし、あくまで一般論としては男女の役割的な考え方は家庭内においても夫婦別姓を例にあげるまでもなく、当時とくらべるまでもない。(Ⅱ部6期　HT男)

――『恍惚の人』の話は、主人公の嫁である昭子が、義父の介護の中で葛藤しつつ、義父の茂造が死んだ時には、無意識のうちに考えが変わっていた、という話だった。

発表のなかで、HTさんがこの話は、30年近く前にかかれていたもので、時代背景や制度や世間の認識が今では違うだろうと強く言っていて、他のグループの4人からは変わっていないだろうといった事が議論されていた。私は、世間の認識度などは、30年前と比べて良くなっていると思うが、介護の大変さなどは、基本的には変わっていないように感じた。(Ⅱ部6期　KN男)

――『恍惚の人』の班の話し合いは、他の班とちがって、30年前と今の介護のあり方は、違っている、違っていない、という話をしていた。全然、本とは違う話と言う事で、その話を止めてしまったが、私はそれを聞いてとてもおかしく、私としてはもっと30年前と今の違いについて話し合いをしてほしかった。

『黄落』の話の内容は、介護側の複雑な心境を描いたものだった。確かに、介護は絶対的に妻の負担が大きい。しかし、妻が求めていたのは心身両面での手助けと理解と、穏やかな感謝であった。この夫は、自分が介護をしないことを前提に話をしている。離婚を持ち出す夫と、その前にあなたもオムツをかえてという妻、この二人の考え方が根本的に違っている。とても考えさせられる話だと思った。(Ⅱ部6期　ST男)

――『黄落』は『恍惚の人』を読んで気が付いたのだが、どんなに平和な家庭でもお年寄りの介護となるといろいろともめ始める。昔の人であっても、現代の人であっても男性は、現実から逃げる光景がみられるのではないかと感じた。自分さえよければ妻を離婚した後のことは知らんぷり、そういうのって、人間として生きていく価値ないと思う。(Ⅱ部6期　SD女)

――『恍惚の人』を聞いて思ったことは、介護イコール女性の仕事という時代は終わりに近づいている。しかし、在宅介護においてはまだまだ終わっていない。共働きの夫婦がふえていく時代で、家庭で介護を全て支える事は、大変難しいことが世間に認めてもらっていったからこそ、今のような時代になったのだと思った。

『黄落』を聞いて思ったことは、介護される側はしんどくて辛い事かもしれないが、介護する側もそれ以上にしんどくて辛いのだ、ということである。それに気づかなければ、介護を家族だけで行う事は危険であり、家族崩壊にもつながりかねない。私も介護の仕事をしているが、どんなに疲れていても利用者からの"ありがとう"の一言によって、生まれ変わったようにやる気が湧いてくる。介護する側、される側両方の事をしっかり考えなければこれからの介護の世界は悪い方向へ走ってしまうだろうと思った。(Ⅱ部6期　NG男)

3．経過と考察　－　その意義の確かめ

筆者の選んだこの4冊は、2003年に出版された梅谷薫の著書『小説で読む　生老病死』[14]で「生老病死」の「老」の部分で選ばれていた4冊であった。本の選択はあまりずれていなかったと思った。

しかし、この、本を読むという課題は学生にすんなり受け止めてもらったわけではない。

――私は授業でこのテーマが出て本を読まなければならない時、正直何考えとんねん、この先生は、本は強制されて読むものと違うやろ、仕事も学校も忙しいのに、どこにそんな時間があるねん、とそう思った。しかし、『黄落』をよんでいくと、なるほど考えさせられる。先生が読むように言った気持ちが何となくだが、分かった。最初クラスの皆が嫌がっていたのに読み出すとおもしろいわ、とあちらこちらから聞こえてきた。私もその一人である。先生が授業で出した4冊とも暇があれば読んでみたい。それが今の私の気持ちである。(Ⅱ部5期　OT男)

自分たちの選んだ本を読んで発表をして、その本についての感想をいう。レジュメは用意されているが、他の聞き手はその本は読んでいないのだから、読んでいない人たちに内容を伝えなくてはいけない。メンバー同士の話し合いも聞き手を意識して進められねばならない。

2週間にわたって老人福祉論の授業でこれらの合評が行われたが、最初の週に比べて次の週

のグループでは、わかりやすくまとめて発表したり、問題点について討論する力がついてくる。要領もわかってきて、準備や進め方にもそれなりに工夫がなされてくるため、感想文の内容も変化してくる。説得力のある意見だった、もっとレジュメをしっかり作る必要がある等のコメントもはいってくるし、司会者の話の引き出し方が大変よかった。もっとこのテーマについて深く話し合ったほうが良かったなど、運営に関する意見も出てくる。

しかし、この方法によって得られる成果は、知的好奇心を呼び起こすことである。今まで手がけたことのない本を読んだり、発表や討論を行ったり聴いたりして、この人がこんな感想や意見をもつ本というのは一体どんな本なのだろう、是非読みたいものだと思う。普段、教室で机をならべている友だちの意見を聞くことで、好奇心はいっそう高められるのである。

筆者は、書物についてだけでなく、その週の新聞の老人福祉に関係している記事を選んで、「老人福祉新聞」として、授業毎に学生に作成してもらい、内容をまとめて発表をし、それを聞いてコメントを書いてもらう時間を作った。

このように、学生には出来るだけ多く発表したり、討論したりする時間をつくると、当然、クラスの全員が発表する機会が多くなる。しかし、発表をしたり、意見を述べたりする事が非常に不得手な学生もいる。皆の前に立つだけで頭が白くなる学生もいる。自分の意見をまとめるのに時間がかかる学生もいる。意見の内容を適切な言葉でなかなか伝えられない学生もいる。そういう学生の事情をクラスメンバーはよく分っていて、その学生に必要なだけの時間を待つ事ができる。苦手な学生は、待ってもらっている周囲のやさしさを感じて、何とかそれに応えたい、という思いになり、頑張る事ができる。周囲の者も、その頑張りに心の中で拍手ができ、自分も頑張ろうと思う。こういう雰囲気がクラスに作られていくと、待ってもらえる安心感にささえられ、自分自身を表現していくことができ、そこを自分の「居場所」だと思える。待つ事ができると、自分のなかに他者を受け入れる余裕ができる。このように、集団でのかかわりのなかで人間関係が深められていく。

このような人間関係は、介護福祉士に基本的に求められる、人を信頼する力であり、利用者から信頼される力になり、ひいては問題解決する力に繋がるのではないだろうか。実を言えば、私自身もこのような集団に育ててもらってきたし、現在もそうであると感じている。

III 「ききとり」による高齢者の人生へのアプローチ

1．高齢者が生きてきた時代

「ききとり」のねらいは、一つには高齢者の生きた時代を知ることである。

私たちは生きる時代を選ぶ事はできない。80歳前後の方は、第一次世界大戦が終了した頃に誕生され、15歳ごろに15年戦争となり、25歳ごろに敗戦を迎える。人生で「わたしが一番きれいだったとき」（茨木のり子）[15] は、戦争と戦後復興の時代で、それを生きぬかれた方たちである。この年代の方には戦争をぬきにしてそれぞれの人生がありえない。

二つ目は、人の話を聴くことと、同時に、コミュニケーション能力を高めることである。

介護福祉士の仕事はコミュニケーション労働である。話を聴き、言葉や表情から相手の言いたい事、言いたくない事を読みとって、相手の人間像を結ぶことである。利用者とコミュニケーションを行いながら利用者の納得と合意を得ながら利用者像を結び、その利用者に適切な介護、時には代理決定を行って、生活を援助していく労働である。

三つ目に、高齢者の生の話を聴く事で、高齢者の大切にしている価値観を知ることである。

若者にとって、高齢者は異質な存在である。

高齢者は、若い学生にとって半世紀以上の年齢差があり、自分たちの生まれ育った時代とは隔世の感がある。そこで高齢者の生の声を聴く事で、何故、高齢者がこのような物の見方や考え方、感じ方をするのかを知ることができる。そのためには、なによりも利用者や家族の思いを知る必要がある。

今回の「ききとり」でも、電話や手紙ではなくて、直接ききとりの相手と会う、という条件をつけた。また、人と出会うことは、相手を介して" 自分との出会い"をすることにもなる。

「ききとり」の前に

このような作業に入る前の導入として、二つの作業を行った。

一つは、歳をとるとはどういうことか、時間というものを実感できるように、自分が80歳になった時を想定してもらい、「80歳の自画像とその時の状況」を書くという作業である。

手鏡を用意してもらい、現在の自分を80歳に変身させていくのである。これは愉快な作業で、女子学生は可愛いいおばあさんの自画像を描く。そして、「その時の状況」は、80歳になると、すでに夫はこの世に居なくて、悠々自適の生活を楽しんでいると一様に想像して文を書く。しかし、男子学生は、いかにもくたばった自画像のうえに、80歳にもなれば自分が既に死んでいるか、ボケて、施設でお世話になっている、というイメージの選択をしている。これも冊子にして皆に紹介すると、友だちの意外な面を発見し、学ぶ仲間としての親しみが急速に深まる。中には、将来の自画像をなかなか想像する事ができない学生もいる。しかし、まずこうして、「自分の80歳」と出会う経験をしてもらう。

二つ目は、20世紀はどんな時代だったかを学ぶために歴史の勉強を行う作業である。

グループで時代を分担し、20世紀の出来事の年表を作成し、そのうち現在80歳の高齢者の人生に大きな影響を及ぼしたと予想されるものを3つあげて、何故そのように思うのかの理由についてグループ発表を行った。

「ききとり」の方法は、必ず直接本人と会う事を約束事とした。「ききとり」にあわせて、許可がもらえれば、相手の自画像もデッサンさせてもらうよう指示した。「ききとり」の相手が身内の方に依頼できる学生以外は、相手を探すのに苦労したようである。

クラスで話し合って確認した「ききとり」の内容や態度、時間については次のとおりである。

前もって「ききとり」のアポイントをとる。どのような事を聴きたいのかについて簡単な内容も伝える。準備としては、聴くべき項目のノートを予め用意し、大体の予備知識（時代背景、地域、戦争体験など）を得ておく。「ききとり」内容は、80歳の高齢者の方にとって、自分の人生で嬉しかったことや大変だったこと、自分の人生に大きく影響を与えた事、などのおおまかなことは決めたが、具体的な質問項目は各人にまかせた。

話を聴く態度については、相手とのラポールをつくる。そのために、まずこちらの心を開く必要があること等の確認をする。また、時間は目安として30〜40分ぐらいが限度であり、それ以上必要ならば再度、訪問依頼をお願いする。

出来上がった聴きとり内容は、400字5枚程度にまとめてパソコンで入力して提出してもらう。

このようにして、作成された―80歳高齢者ききとり『玄冬のとき＊』[16] は、2001年Ⅱ部5期生、2002年Ⅱ部6期生、2002年Ⅰ部10期生ごとに冊子としてまとめられている。

＊黒（玄）はけわしい、終わり、陰を意味するが、他面天の色、静か、深い、妙なる、遠いという意味もある。老子は、時間・空間を超越して存在し、天地万物の根源である絶対的な道の性質を「玄」といっているのである。『成熟と老いの社会学』[17] より

2．高齢者の意識を知る

－大切にしている価値観は何か－

各期の『玄冬のとき』の一部を次に紹介する。それらを読んでみて、改めて80歳の高齢者の人生に、戦争が大きく影響している事を知ることができた。戦争で身内を失ったり、住んでいる地域や街の様子が一変し、人々の生活や人生を大きく変えたことがわかる。

「私が一番心に残っている事は戦争だなぁ。空襲警報がなるとすぐ電気を消し、防空壕の中にはいった。空襲は雨のようにざぁざぁと音を立てながら家や人、町を焼き尽くしたよ。言葉では語れないなぁ」（Ⅱ部6期）といわれ、学生は、テレビ等でしか戦争の事は知らなかったが、テレビで見た映像に重ね合わせて、その時の様子を想像している。

見慣れた地域は変化し、「大阪大空襲では、梅田まで死体の山を越えていくすざましい光景はまだはっきり憶えている」（Ⅱ部５期）、「堺の空襲はそりゃ―すごかった。爆弾でちぎられた手や足が道にたくさん落ちていたんじゃけ。そうそう電線にもぶらさがっていたな」（Ⅱ部5期）、「昭和20年3月の大阪大空襲は、家の近くまで火の手が迫り、とても恐ろしかった。焼夷弾が降る中を妹の手をとり、近所のおばさんも連れて遠くの麦畑まで逃げた」（Ⅰ部10期）、「辺り一面火の海で、現在の環状線沿いには、真っ黒に焦げた死体が並んでいた」（Ⅰ部10期）

生活が変わる

当時の、食べる事への記憶が生々しく語られている。「空襲で家を焼き出され、食べるものもなく、祖母の着物を持っていって米に替えてもらい、それに菜っ葉をいれて食べていた事、だんご汁やジャガイモ、大豆といったものもよく食べた」（Ⅰ部10期）、「毎日芋ばかり食べた。たまに手に入れた白米も、6人家族で食べるほどの量はない。天井がうつるほどのおかゆを、6人で食べたのを憶えている」（Ⅰ部10期）、「当時の食事について、米（外米・高粱）麦、乾麺、さといも（甘藷）を良く食べていたということです。"よく食べた"、といっても貧しかったため、一回の食事量は少なかったらしいです」（Ⅰ部10期）、「イナゴの串焼きは、イナゴを何匹か串に刺して、醤油につけて焼いて食べるのですが、食べる折、イナゴの後ろ足はあらかじめとっておくそうです。食感は、ぱさぱさして、味も決して美味しくないそうです。空腹を満たすため、仕方なく食べたといっていました」（Ⅰ部10期）、「夜、家の窓を閉め、隣近所に匂いがもれないようにして、母が揚げてくれたてんぷらを兄弟と競争するように食べた日が懐かしい」（Ⅱ部5期）、「塩は、海水を煮詰めて作り、シャンプーは海藻で、石鹸は壁土を使っていた」（Ⅱ部5期）飽食の時代に育った若者たちにとって、想像を絶する食料事情である。

「やがてむかえた敗戦で、食べるものといえば、芋ばかりのとっても惨めな生活が続いた」（Ⅰ部10期）、「敗戦すぐに配給があったもののわずかで、そば粉、とうもろこし粉、米糠の饅頭、雑草も食べたらしく、それを子どもに与え、本人は食べない日が多かった」（Ⅰ部10期）、「米の配給もあったが、それがサツマイモになったり、砂糖になることもあった。米の無い時は、それを闇市で売って米を買った」（Ⅰ部10期）食べることの苦労は、戦争が終わった後も、続いていくのである。

「母親が、娘の勤労奉仕を避けるため急いで結婚を決めたという」（Ⅰ部10期）、「教師をしていたため、空襲サイレンが鳴る中、学校へ向かった。天皇の写真が飾ってある奉安殿を守るため」（Ⅰ部10期）、「戦争が始まってからは、婚約者と離れ離れになり、婚約者も戦死し、帰らぬ人となった」（Ⅰ部10期）、「大阪市立東高等女学校に入学し、1年生の時は普通に学校にいって勉強したが、昭和19年学徒動員で軍需工場へ働きにいかされることになった。弟や妹は、学童疎開で滋賀県の五箇荘村にいかされることになった」（Ⅰ部10期）。

日本が植民地支配をしていた外地での戦争体験も語られている。「終戦で引き上げるとき、金歯を歯医者にくすねられる話」（Ⅱ部5期）や、「終戦後、夫がシベリアに行っていたので子ども二人を連れて無一文で日本に帰ってきた」（Ⅱ部5期）話、夫が戦地に行って遂に帰らなかった「ききとり」もある。

従軍体験を語る

男性の高齢者では、自らの戦争体験が語られている。「特攻隊を運ぶ役目をしていた」（Ⅱ部5期）、「護送船にのって魚雷をうけたこともある」（Ⅱ部5期）、「昭和18年（当時16歳）、国のため、郷土のため、父母のためと胸震わせて、特別特攻隊としての訓練の日々を送る。訓練はとても厳しく、眼ヲツムレバ命中セズと、棒でお尻を打たれた」（Ⅱ部５期）、「支那で徴兵され、支那各地で戦った」（Ⅰ部10期）、「召集され、1944年10月1日秋田の部隊に配属された。2週間後には満州（現中国東北部）の部隊に入れられた」（Ⅰ部10期）、「昭和18年、当時中学生の途中で満州開拓青少年義勇軍に参加し、満州に渡った。昭和20年、敗戦とともに義勇軍が解散し、ソ連軍に強制徴収され、約半年間は使役として働かされ、ソ連軍の略奪目的が終了した途端、我々は解放された」（Ⅰ部10期）、「太平洋戦争真っ只中の昭和19年11月、陸軍〔関東軍〕に入隊されたそうです。入隊後はソ連国境（ソ連と満州の国境）に行かれたそうです。終戦後は、シベリアに強制収容されたそうで、ソ連国境からシベリアまでには、徒歩で行かれたそうです」（Ⅰ部10期）。

女子学生の勤労動員の話はたびたび出てくるが、女性にも召集令状がきて、共同生活をしたこともあったという「ききとり」の事実に驚かされた。

「女子青年学校1年の時、赤紙（召集令状）がきて、福井県武生市にある武生訓練所に動員されました。そこでは、自給自足の共同生活を送り、よもぎやよめなをおかゆに入れて食べました。また、なぎなた（薙刀）など、武道の訓練もうけました」（Ⅰ部10期）。

男性だけでなく、子どもも女性も高齢者も国民すべての生活そのものが戦争一色に染まっていたことが「ききとり」でよく分かる。

高齢者の思いや意識を知る

「ききとり」の準備段階で、従軍体験を直接きくことについては、学生の間で躊躇されていた。「戦争体験は、気を遣うような内容かと思ったが、思い出話のようだった。時間がすべてを解決してくれるようだ。生きてきた事自体に価値があると感じた」（Ⅱ部5期）、この「ききとり」の中で、「今生きている高齢者の方は、戦争をいろいろな形でくぐり抜けてきたなかで、やはり運というものがものすごく働いていると実感できる」（Ⅱ部5期）、「悲惨な体験として語るのではなく、生きてきた中での経験であり、異常な状態とは感じていない。祖母の人生を聞いて今までおばあちゃんとしての姿しか知らなかったが、一人の女性として頑張って生きてきた事を知り、尊敬する気持ちが出てきた」（Ⅱ部5期）、「現在ひどい痴呆で、自分の子どもの名前も忘れてしまいます。けれど、痴呆は戦争の傷まで忘れる事はできませんでした。戦争の話をする瞳は、人間の生を心から訴えています」（Ⅱ部5期）

「戦争に行った男性とは違い、女性の受け止め方は違うのではないか。むしろ戦後のほうが、かなり苦労があったようだ」（Ⅱ部5期）、「夫は戦死。戦後も再婚せず一人で頑張っていた。80歳を越えて今でも畑仕事をしている。この時代の人は働くのが当たり前の事として捉えていて、それが生活リズムになっている。自分たちの働く事についての受け止め方の違いを感じた」（Ⅱ部5期）、戦争を体験してきた現在の高齢者の思いや意識をこのように受け取っている。

「ききとり」の相手は、自分に繋がる祖父母

やご近所の方、さらにアルバイト先のデイサービスで出会った方など様々である。

デイサービスで出会った、一番長寿で、私の知らない時代を生きてきた方の人生ってどんなんだったろうと興味を持って、「ききとり」をおねがいしている。

「ききとり」を終えて「笑顔で話してくださる方へ感謝の言葉でいっぱいになった」(Ⅱ部5期)、「自らをふりかえり、自分は情けなくなった。こんな豊かな時代に生まれて生活しているのに現実から逃げて投げやりになって生活しているのを反省し、"ありがとう"を心のポケットにいれて帰路につく」(Ⅱ部5期) のである。

自分に繋がる身内での「ききとり」では、「私に大きな希望や期待を持ち、また、祖母の愛情を改めて実感し、祖母を大切にしようと心から思った」(Ⅱ部5期)、「祖母の若い頃なんて聞いた事がなかった。聞いても若い頃のイメージがつかない。若くて働いている頃の話を聞けて、人生の長さが実感できた」(Ⅱ部6期)、「あの一日で祖母の何年もの人生を知り、知らなかった祖母の一面を見た事はずっと忘れられない思い出です。勿論しあわせそうな顔もです」(Ⅰ部10期)、「このききとりをした日は、祖父の初盆で福井に帰った日でした。その日の夜は、20年ぶりに祖母と二人だけで、同じ部屋に寝ました。涼しい風が入ってくる部屋で、祖母の寝息を聞きながら、ぐっすり眠れ、実習中の疲れも癒されました」(Ⅰ部10期)、

地域の方に「ききとり」をお願いした学生もいる。いずれにしても、「改めて自分は幸せな時代に生きているのだな。その人が楽しい時代を過ごしている時はうれしそうな顔をしていて、辛い体験を話している時は顔色も曇っていた」(Ⅰ部10期)。

このように、「ききとり」をしてみて、当初考えてみなかった自分の存在につながる長い時間の存在や愛を高齢者から受け取っている。そして、自分が生きることの意味を自問自答している。「その時代の人たちはその苦労を糧にして今の豊かな日本を築いてきたのだと思います。私はそれに感謝して恩返しのつもりでお年寄りに接していきたいと思いました」(Ⅰ部10期)、また、高齢者の思いをきいて、「デイケアに通所されている利用者が大好きになり」(Ⅱ部5期)、自分自身も「後悔のない人生、喜びの人生を送ろう」(Ⅱ部5期) 等のように、生き方の指標を教えられている。

3．まとめと考察

聴くことは「ケアをするもの」と「ケアをされるもの」の関係をつくる上でもっとも大切な介護福祉士の専門性にかかわる技術である。謙虚に相手に向かい合う姿勢がなければ「聴く」ことは出来ない。相手から学ぶ事もできない。メイヤロフは、「その人にとって人生とは何なのか、その人は何になろうと努力しているのか、成長するためにその人は何を必要としているのかなどを、その人の"内面"から感じ取るために、その人の世界にいり込んでいく」必要を『ケアの本質』[18] で述べている。そして、その著書のなかで、"他者の中に私が理解できるものは、私が自分自身の中で理解できるものだけなのである"と続けているように、ケアの専門職となるためには、自分自身の理解を深めていかなければならないのである。

学生は実習先で高齢者にどのようにコミュニケーションをとってよいか悩むことが多い。「こんにちは、今日はよいお天気ですね」で終わってしまう。高齢者に直接会って、話を聴く経験をすることで、高齢者の存在の発見があり、歴史や過ごしてきた時間を身近に感じる事ができる。その人の生きてきた時代に思いをめぐらし、どこで、どんな風に、何をして今日まで生きてこられたのか、それらの事を想像する事ができれば、心と心が開かれる関係が生まれるきっかけになる。そして、その人に愛着を覚え、好きにもなるのである。

また、高齢者自身も自分の生活史（戦争の体験も含め）を話し始めて、今だから話せるという内容もあり、ああ自分の人生もまんざらでない、長い年月にはこんなにもたくさんの事があり、自分は精一杯やってきたのだというように、自分自身を肯定的にとらえることが出来るのではないだろうか。

大江健三郎が次の世代の子どもたちに伝えたいと書かれた著書『「新しい人」の方へ』[19] の中で、子どもの頃の話をしている。子どもの頃から現在まで、数え切れないほどの後悔を今、ふりかえってみて、子どもの頃から、自分の性格を変えるためにがんばってみるべきだった、と書かれている。しかし、そのすぐ後に、「しかし、面白いことに、子供の皆さんに向けてこのように書いていると、―そうだ、いまからでも、遅くはないかも知れない、という気持ちになるのです」と続けられている。自分の人生を振りかえり語ることで、子どもの頃からずっと後悔している自分の課題に対しても、今からでも遅くないと、気持ちのしきりなおしが出来ることを紹介している。

コミュニケーションを媒介として、双方の行き交う気持ちの交流があって、はじめて「その人らしさ」とは何かがわかり、「その人らしさ」が持続できるような援助を心から行える専門職になれるのではないだろうか。

最後に、たった半世紀のことであるが、若い学生には言葉として知っていても、その内容がわからない言葉がたくさんでてくる。

省線、チンチン電車、火の見櫓、裾あげ、学童集団疎開、闇市、防空頭巾、学徒動員、配給、カフェ、憲兵、バケツリレー、甲種予科練、女子警防団、もらい乳、もらい風呂、奉安殿、女子青年学校、勤労奉仕等、戦争に関わる言葉である。

出来上がった冊子『玄冬のとき』は聞き取らせてもらった方にお礼の返事をつけて送ってもらうよう2冊学生に渡した。

Ⅳ　二つの取り組みの考察と課題

書物を読む機会の少ない若い学生にとって、文字ばかりの本を読むことの課題は負担がかかりすぎるのではないか、Ⅱ部の学生にとって、授業時間外の高齢者への「ききとり」の課題は時間的に可能なのかという点に一抹の不安があった。しかし、早めに課題を提示しておくなどの配慮をして課題図書を読むことや、夏休みを利用して、高齢者の「ききとり」を実行してもらった。

古典やベストセラーからは、作者の投げかけた問題意識によって、学生の高齢者像の概念がゆさぶられている。しかし、そのことで自分の感性を豊かにし、自分で考える力をつけている。そのことは、「合評」のあとの感想文からも読み取ることができる。

さらに、社会や時代が高齢者をどう位置づけ、社会の構成員として考えていかねばならないかについてその方向性を見いだすきっかけにもなったのではないかと考えている。

「ききとり」をすることによって、その方の人生に深く関わることができる。時代は自分で選ぶことの出来ないが、その時代を生きた長い人生のなかで経験してきた病気・戦争・災害などの様々な出来事をくぐりぬけてきた事実を知ることで時代を知り、その高齢者の強靭な生命力に畏怖の念を感じている。

この高齢者はなぜ、白いごはんと梅干しが一番のご馳走になるのか。物の使い方ひとつにも、もったいないと思い執拗にこだわるのか、などの背景を理解し、対象者が大切にしている価値観を知ることができる。だからこそ、その価値観を尊重し、共感し、そこにより沿うことで、利用者の尊厳のある生活を援助することができる。そして、対象者をもっと知りたいと思う心

を育てることができる。自分自身の学ぶ課題も見出し、生きることの深い意味も考えさせられている。それらのことは、各期ごとに作成された『玄冬のとき』の中の記録から伺う事ができる。

読書と「ききとり」の方法は、読む・書く・まとめる・話す・聴くという基本的な能力をつけることもめざしたものであるが、施設で、8割を超えるといわれている痴呆高齢者の処遇のヒントも利用者の半生を知ることにあるといわれている。高齢者の痴呆ケアに関する公開講座での最新情報として、「こういう症状があれば、こうするという決まった方法はありません。ヒントは、その人の生きてきた半生の中にあります。」と伝えている。(2003. 12. 19『毎日新聞』繁田雅弘・東京都立保健科学大学作業療法学科教授)

国連は、20世紀の最後の年を「国際高齢者年」とした。そこでは、高齢者のための国連原則としての「自立」・「参加」・「ケア」・「自己実現」・「尊厳」の5つの原則が提起された。21世紀の介護福祉士は、これらの原則を理解でき、実践のできる人権感覚の持ち主でなければならない。高齢者の豊かな生活が保障されるような社会形成と福祉文化の創造の担い手としてすぐれた介護福祉士の養成が課題である。そのために、高齢者や障害者への観察力・想像力を育むすぐれた文学作品に対して、このような実践を重ね、高齢者福祉の理論化を進める事が今後の課題である。

脚注

1）深沢七郎『楢山節考』新潮文庫　平成10年　64刷〈1964年初版〉

2）村田喜代子『蕨野行』文春文庫　1998年（平成6年単行本）

3）有吉佐和子『恍惚の人』新潮文庫　平成10年、49刷

4）佐江衆一『黄落』新潮文庫　平成11年（平成7年単行本）

5）正岡子規『病状六尺』岩波文庫31－013－2　2003年　55刷

6）エリザベス　キューブラー・ロス（訳）川口正吉『死ぬ瞬間』読売出版社　1998年

7）加藤みどりさんを偲ぶ文集を作る会『交わりのなかで＝ホームヘルパー残像＝』1977年

8）小倉寛子『小倉亀遊　天地の恵みを生きる』　文化出版局　1999年

9）伊藤隆二他編『福祉の思想入門講座・④福祉の文献』柏樹社　1976年

10）「真穂子」編集委員会編『私は幸せです　みんなと出会って」　1999年

11）V・E・フランクル（訳）山田邦男・松田美佳『それでも人生にイエスという』春秋社　1993年

12）木田真穂子『ニーナのねがい』フォーラムA　2002年

13）Ⅱ部5期生『読書合評』大阪総合福祉専門学校　2001年
Ⅱ部6期生『読書合評』大阪総合福祉専門学校　2002年

14）梅谷薫『小説で読む生老病死』医学書院　2003年

15）茨木のり子『現代詩文庫　茨木のり子詩集』　思潮社　1969年

16）Ⅱ部5期生『玄冬のとき』大阪総合福祉専門学校　2001年
Ⅱ部6期生『玄冬のとき』大阪総合福祉専門学校　2003年
Ⅰ部10期生『玄冬のとき』大阪総合福祉専門学校　2003年

17）青井和夫「白秋・玄冬のとき」井上俊他編『成熟と老いの社会学』岩波講座　現代社会学13巻　岩波書店　1997年

18）ミルトン・メイヤロフ（訳）田村真・向野宣之『ケアの本質』ゆるみ出版　2003年（10刷）

19）大江健三郎『「新しい人」の方へ』朝日新聞社　2003年

参考文献

1）尾崎新『「ゆらぐ」ことのできる力－ゆらぎと社会福祉実践』誠信書房　1999年

2）尾崎新編『「現場」のちから－社会福祉実践における現場とは何か』誠信書房2002年

3）佐藤俊一『対人援助グループからの発見』中央法規

2001年
4）鷲田精一『聴くことの力』TBSブリタニカ　1999年
5）川上武　山代巴『医療の倫理』ドメス出版　1970年
6）立花隆＋東京大学教養学部立花隆ゼミ『二十歳のころ』新潮社　1999年
7）山田格『方法としての読書』洛西書院　1998年
8）上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』　朝日新聞社　2000年

（こさか　じゅんこ　本学助教授）